

# 接続助詞「と」の非条件的用法に関する誤用研究

— 中国語を母語とする日本語学習者を対象に —

杜 紅 陽

(2021年10月5日受理)

Error Analysis of the Unconditional Usage of the Conjunctive Particle “-to”  
— Focusing on Native Chinese Learners —

Hongyang Du

**Abstract:** In this paper, we analyze error cases of the unconditional usage of the conjunctive particle “-to” by native Chinese learners in the composition corpus and examine the causes of error. The characteristics of the various misuse patterns and the reasons for them are: (1) learners use “toiuto” as a reminder of the topic, often about specific things or people. The main reason for the misuse is the difference between the range of topics reminded by “toiuto” and the range of topics reminded by the Chinese words “shuoqi” and “shuodao.” (2) The misuse of “niyoruto” can be divided into two parts: the mixed-use with “niyotte” and the misuse of “quoting”. The mixed-use with “niyotte” is due to the similarities in pronunciations, forms, meanings and its translations in Chinese, because they are both derived from the verb “yuru”. In contrast, the misuse of quoting seems to be influenced by the meaning of “yoridokoro.” (3) “Karamiruto” is used to express the basis of a judgment. This misuse is related to the meaning of the verb “miru” and its translation in Chinese “cong ... laikan.” (4) “Ninaruto” is difficult to use as a simple “topic reminder.”

Key words: “-to”, unconditional usage, error cases, native Chinese learners

キーワード: 「と」, 非条件的用法, 誤用, 中国語を母語とする学習者

## 0 はじめに

条件表現をめぐって、多種多様な角度から研究が行われている。条件表現形式が使用される場合、前件と後件の因果関係を表すものもあれば、そうでないものもある。

- (1) 春になると、桜が咲く。
- (2) 天気予報によると、明日雨が降るそうだ。

(1) の「春になると」は一般条件を表しているのに対し、(2) の「によると」は伝聞の情報源を明記

する文型として定着している。

「と」「たら」「ば」「なら」四形式の教授及び学習は、主に条件を表す用法を中心に展開されている。他方で、(2) のように、条件表現形式が取られる非条件的用法（前田，2009）に関する研究は未だに少ない。

本稿は、中国語を母語とする日本語学習者が書いた作文に認められる接続助詞「と」が使用されている誤用のうち、非条件的用法に関するものを対象に、誤用の実態とその要因を明らかにすることを目的としたものである。

第1節では、非条件的用法に関する先行研究を見る。第2節では、使用するコーパスのことも含め、分析方法を述べる。第3節では、誤用例に基づき、誤用パターン別に誤用例の分析と誤用要因の考察を行う。第4節

本論文は査読付き論文である。

では、議論したことをまとめる。

## 1 先行研究

国立国語研究所（1964）は、慣用的用法などを除いて、条件句の用法を「陳述的条件」「前置き」<sup>[1]</sup>「客観的用法」に分けている。

- (3) ①陳述的用法 「すればいい」等  
 ②前置き 「換言すれば」等  
 ③客観的用法

「陳述的用法」は、その直後に「いい」「いけない」「だめ」など評価を表す語がつづき、全体として一つの述語に近い表現を指す。「前置き」は、題目の提示、発言内容についての注釈、表現形式についての注釈、根拠などを表すものである。「客観的用法」は、条件と呼ぶのにもっとも相応しい用法であり、きっかけ・因果関係・前提などの用法がある。前田（2009）は言語と事態の関係のリアリティに着目し、「非条件リアリティ」である非条件的用法として、(4)のように、「すればいい」のような評価的用法や、「と言えは」のような後置詞的用法などを挙げている。

- (4) ①並列・列挙 「も…ば、も」  
 ②評価的用法 「すればいい」  
 ③終助詞的用法 「おいしいものでも食べれば？」のようなもの  
 ④後置詞的用法 「と言えは」「から見れば」  
 ⑤接続詞的用法 「そうすると」

叶希（2018）は現代日本語研究会により作成された自然談話録音資料「男性のことは・職場編」を使用し、ビジネス会話と職場の雑談における条件表現を調査している。その結果、ビジネス場面における「と」の用例のうち、慣用的用法が8例（6.6%）、前置きが28例（23.1%）、雑談場面における「と」の用例は慣用的用法が5例（8.8%）、前置きが13例（22.8%）あることを指摘している。

劉曉華（2018）は「仮定的な因果関係」を表さないという基準に立ち、従来の前置き、文型、慣用表現、「それなら」などの接続詞的な表現のほかに、「結果や内容、手段や方法の提示用法」、「発見結果の提示」、「対人機能型の定型表現」<sup>[2]</sup>などの用例も非条件的用法として取り扱っている。その基準に従い、劉曉華（2018）は「日本語話し言葉コーパス」における「と」「たら」「ば」「なら」の条件的用法と非条件的用法の用例数を調査

している。そして、非条件的用法は2832例あり、条件的用法の2865例よりやや少ないが、「と」形式に限ると、非条件的用法（1921例）のほうが、条件的用法（1562例）より上回っているといった状況を明らかにしている。

池谷（2020）は「日本語日常会話コーパス CEJC」<sup>[3]</sup>を利用し、日常会話で「れば」が使用されている例文100例を分析し、次のことを明らかにしている。日常会話で使用される「れば」は、そのほとんどが非条件的用法である。そして、非条件的用法の下位分類「前置きの用法」「モダリティの用法」「イディオマティックな用法」<sup>[4]</sup>のうち、一番用例が多かった「モダリティ的用法」は、文末にモダリティ要素や終助詞をとることで、「勧め・アドバイス」「残念感・不満足」「予測・可能性」「推量」を表すことができると述べている。

このように、非条件的用法も条件表現研究の重要な課題であると言える。学習者の非条件的用法の習得状況及び過ちやすい非条件的用法を明らかにすることは、日本語教育の一助になると考えられる。しかし、学習者の条件表現の習得状況を課題としている研究は、条件的用法を中心とするものが多いが、非条件的用法の習得状況を研究するものがめったにない。特に、「と」の非条件的用法の習得状況についての考察は未だに十分にされていない。

## 2 分析方法

『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.10（以下、「作文コーパス」と略す）は、関西学院大学于康研究室によって構築された大型タグ付きコーパスである。中国の大学60校からの日本語学習者が書いた作文を対象に、正誤タグや文法研究用タグの付与がなされている。正誤の判断及びタグの付与などは、日本語教育に携わっている日本語母語話者によって行われている。ただし、タグの付与は文法的な判断のみならず、文脈によっての判断や訂正もなされている。そのため、既に付与してあるタグと相違する直し方なども考えられる。

誤用の種類としては、「\*ト→Y」「\*ト→○」「\*Y→ト」といったものがあるが、本稿は、「\*ト→○」「\*ト→Y」は中心に分析と考察を行う。それは、「\*ト→○」「\*ト→Y」には学習者が何らかの理由で「と」形式を使用しているという共通点があり、その要因に内在的なつながりが見られる可能性があるからである。「\*ト→○」は「と」形式の箇所を削除、「\*ト→Y」は「と」形式の箇所を別の表現形式に修正することを示している。

誤用例の抽出方法としては、まず「作文コーパス」から接続助詞「と」を含む誤用例を抽出し、次にその誤用例から、「と」の非条件的用法に関わる誤用例を抽出した。研究対象となった誤用文数は45例である。誤用例に記した「< >」は誤用及び訂正の箇所、「\*」は学習者が間違っていること、「→」は校閲者によっての訂正結果を表している。

### 3 分析と考察

研究対象となった誤用例の45例のうち、「\*ト→Y」が43例、「\*ト→○」が2例ある。「\*ト→○」の2例はともに「\*トイウト→○」であり、いずれも(5)のような「なぜなら」と「なぜかという」と間違っている誤用である。

(5) なぜなら<\*というト→○>、中国の心は意識と無意識の間で存在している。

「\*トイウト→○」の2例は、学習者が類似表現を混同していることに起因したものであると考えられる。議論の便宜上、この2例は本稿の考察対象から外す。

表1は、「\*ト→Y」の各誤用パターンを形式別に示したものである。

表1 「\*ト→Y」の各誤用パターンの頻度と割合

	頻度	割合 (n=43)
*トイウト→Y	19	44.19%
*ニヨルト→Y	12	27.91%
*カラミルト→Y	10	23.25%
*ニナルト→Y	2	4.65%
合計	43	100%

表1から分かるように、「\*ト→Y」においては、「\*トイウト→Y」「\*ニヨルト→Y」「\*カラミルト→Y」「\*ニナルト→Y」という四つの誤用パターンが観察され、「\*トイウト→Y」(19例, 44.19%)、「\*ニヨルト→Y」(12例, 27.91%)、「\*カラミルト→Y」(10例, 23.25%)の三つに集中している。

以下、「\*ト→Y」を中心に、誤用パターン別に学習者の誤用例を分析し、誤用の要因を考察する。

#### 3.1 「\*トイウト→Y」

##### 3.1.1 「\*トイウト→Y」の誤用分析

「\*トイウト→Y」は、学習者が「というト」を使用しているが、それを別の表現に修正するというもの

である。「\*トイウト→Y」の詳細を見ると、「\*というト→は」が5例、「\*というト→といえは」が3例、「\*というト→には」「\*というト→としては」がそれぞれ2例、「\*というト→というのは」「\*というト→と言っても」「\*というト→においては」「\*というト→に関して言えば」「\*というト→なら」「\*というト→このことは」「\*というト→ということを」がそれぞれ1例である。

これらの例の直し方は多様であるが、学習者はあることがらに言及するとき、それをキーワードとして提示している。本稿は藤田(1987)を参考とし、「関連のキーワード提示」を「主題」を呼ぶ。すなわち、学習者は「というト」を、主題をとりたてる働きとして用いている。しかも、その際には特定の物事や人物が来ていることが多い。(6)~(9)は「\*トイウト→Y」の誤用例である。

(6) 日本金融体制は、典型的な東西の体制を融合して生まれたものである。欧米の体制<\*というト→は>20世紀30年代の金融危機の後は既に完成しており、欧米の影響の下で日本は80年代まで同じ体制をその…

(7) 「中日同形語」<\*というト→には>、未だ明確な定義がない。

(8) ルームメート<\*というト→に関して言えば>、私はとてもとても幸せだと思う。うちの寮のみんなはとても優しい人だ。

(9) 羽は、羞恥心のない人ではなく、非常に腹黒い人でもなかったもので、結局失敗してしまった。腹黒くない<\*というト→というのは>、やさしい心を持っていたからである。

(6)は、欧米と日本の金融体制と比較する文であり、「対比」を表す「は」のほうが相応しい。(7)は、「里山には色々な定義がある」のような存在表現の間違いである。(8)は、ルームメートに対する感想を述べたものである。(9)は、前の文で述べられた内容について説明を述べたものである。この場合、説明の主体に当たる名詞、あるいは名詞に相当するものが必要とされる。

これらの例を見ると、(7)(8)(9)はいずれも特定の物事か人物を主題にしていることが分かる。この点について、市川(2007:361)は、「文章の中で典型的、代表的な事柄を話題にするときには、一般的に知られているものや人が結び付きやすい」と指摘している。学習者は特定の物事か人物を主題にとりたてるのに使用していることが特徴的であると言える。

(10) は「という」と「といえば」に直されている例である。

- (10) 餃子 < \*という → といえば >, 代表的な中国料理で、中国人がみんな作れると思われるかもしれないが、私は餃子が作れない中国人だ。

「という」と「といえば」の相違点について、森田・松木 (1989:51) は、「という」は「それに続く述部に密接につながっていくニュアンスが強い」、「といえば」は「そこでいったん切れ、一息おいてから述部を続けるニュアンスが強い」と指摘している。(10) の「という」は文末における述語とのつながりが相当弱い。従って、(10) では、「といえば」に直されているのである。

### 3.1.2 「\*トイウト→Y」の誤用要因

前節の分析によって、学習者が「という」を主題のとりたてとして使用していることが明らかになった。他方で、「という」は使用制限の少ない文法項目であるため、特定の物事や人物が否かだけを手がかりに論じるのは難しい。そこで、「という」に対応する中国語表現が関係している可能性があるかどうかを考えてみたい。

『中日・日中辞典』(北京商務印書館・小学館編, 2003) によれば、「という」は中国語の“说到”“说起”などに対応する。(11a) と (11b) は『中日・日中辞典』における“说到”の例文と日本語訳, (11c) と (11d) は筆者が作った文である。「?」は非文ではないが、不自然な文であることを表す。

- (11) a. 说到小王, 他可是一个多才多艺的青年。  
 b. 王君といえば, 他是多芸多才な若者だ。  
 c. (?) 说到小王, 是一个多才多艺的青年。  
 d. (?) 王君という, 多芸多才な若者だ。

(11b) と (11d) の違いは、「彼は」の有無にある。(11b) も (11d) も「王君」という特定の人物をとりたてているが、「は」の働きにより、(11b) の違和感 (11d) とは異なり薄くなる。この点は中国語 ((11a) と (11c)) も同様である。それにもかかわらず、学習者は間違っ「という」を使用している。そこで、誤用例を精査したところ、「という」による主題の取束が興味深く、注目に値する。ここで再び (10) を例として取り上げる。(10) は「餃子」をもとに連想した内容であるが、文の初めにとりたてられた「餃子」が文の最後まで主題として働いている。

そこで、日本語母語話者が「という」を使用するときの主題の取束と、中国語母語話者が“说到”“说起”を使用するときの主題の取束を比較するために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』<sup>[5]</sup> から「という」の用例、中国の文学作品から“说到”“说起”の用例を抽出し調べてみた (下線及び (A) (B) などは筆者による。異なる物事を表す標識として、一本線のほかに、点線、二本線、波線なども使用している。更に、議論の便宜上、順に (A) (B) などをつける)。

- (12) 古くも「臥薪嘗胆」(A) というと、苦しみに堪えて目的を達することだった (B)。心身の苦難を堪えしのぶこと (C) が要求され、その結果、みごとな成功をおさめた (D)。古来の日本人 (E) は我慢することを美德と心得た。(中西進『日本人の忘れもの』)
- (13) 新しい衣類 (A) というと、もう一つのエピソードが思い出される (B)。上品な茶色のカーディガンを着て現れた男性のことだ (C)。前日、私は彼の音信を求めて三十年以上過ごしてきたという姉と会った (D)。(須藤八千代『ソーシャルワークの作業場』)

(12) は、「臥薪嘗胆」(A) を主題にとりたて、「苦しみに堪えて目的を達すること」(B) は、その (A) についての解釈となっている。それに続く (C) と (D) は、(B) の更なる言い換えに当たるものであり、(A) とのつながりは弱い。(E) には「日本人」が出現し、(A) とのつながりも弱い。(13) も同様であり、(C) と (D) は、(A) というよりは (B) につながっている。こうして見ると、「A というと、B」によって提示される主題 A は B に対応するものであり、主題 A の取束は B によって与えられることが多い。そして、その更なる後ろの内容は、B とのつながりは強いが、A とのつながりは極めて弱い。

一方、中国語の“说到”“说起”によってとりたてられた主題は、後の文に長く続いていく状況が認められる。(14) と (15) は、中国文学作品における“说到”“说起”の例である。

- (14) 幸亏有你叔父, 要不是他, 我早就饿成两层皮了! 说起你叔父 (A), 现在受这罪 (B), 老天爷要是带着眼镜, 绝不至于看不出好坏人 (C)! 静儿! 等你姑父回来, 你跟他要一块钱, 给你叔父买东西给他送了去 (D)。我那个兄弟, 待我真是一百一, 我可忘不了他 (E)。(老舍「老张的哲学」)

(15) 北平尋常提到江苏菜 (A), 总想着甜甜的膩膩的 (B)。现在有了淮扬菜 (C), 才知道江苏菜也有不甜的; 但还以为油重, 和山东菜 (D) 的清谈不同。其真正油重的是镇江菜 (E), 上桌子常教你膩得无可奈何。扬州菜 (F) 若让盐商家的厨子做起来, 虽不到… (朱自清「说扬州」)

(14) は小説の会話文であり、特定の人物「你叔父(君の叔父)」をとりたてている。(A) においてとりたてた「君の叔父」は、(B) のみならず、(C) 「彼はいい人」という含意、(D) 「何か買って彼におくってくれ」という指示、(E) 「彼は私にやさしい。彼のことを絶対に忘れない」という心情の表出につながっている。

(15) は、江蘇の飲食についての文章である。「山东菜」は山東地方の料理であるが、「淮扬菜」「镇江菜」「扬州菜」は全て「江苏菜 (江蘇地方の料理)」に属するものである。従って、(F) までは全部 (A) をめぐる内容である。このように、中国語の「说到」「说起」によって提示される主題は、一文の主題を超える「談話レベルの主題」であると言えよう。中国語の影響が原因か、学習者は「というと」を使用し、物事や人物をとりたてるときも、主題について長く文をつなげるのである。

以上、「\*トイウト→Y」について分析と考察をした。学習者は「というと」を、物事や人物をとりたてる文法項目として理解していることと、特定の内容を主題にするのに使用していることが誤用の特徴である。この誤用パターンは「というと」と中国語の「说到」「说起」における主題の収束の相違に起因するものであると考えられる。

### 3.2 「\*ニヨルト→Y」

#### 3.2.1 「\*ニヨルト→Y」の誤用分析

次に、「\*ニヨルト→Y」の誤用例を見る。学習者は「によると」を「引用」の他にも、「手段」「場合」「根拠」といった複数の意味として使用し、「によると」と「によって」の使い分けに混乱が見られることと、その「引用」の仕方に間違いがあることが特徴的である。「\*ニヨルト→Y」の12例のうち、「によって」との混用が8例<sup>6)</sup>、「引用」に関わる誤用が4例である。(16)～(18)は、「によって」との混用の誤用例である。

(16) もう一つ「木」を加えた「森」にくらべて、樹木の密度の度が小さい。字形<\*によると→によって>、漢字の意味が分かるのは非常におもしろい。それは中国語の魅力的な表現の一つだ。

(17) 私の考えは年齢とか、環境とか、学齡<\*によると→によって>変わります。

(18) 以上の分析<\*によると→によって>、運動の実現をあらわす場合については中国語は「過去形」で現すということがわかった。

(16) は「手段」、(17) は「場合」、(18) は「根拠」を表しており、いずれも「によって」との混用である。

(19) 及び (20) は、「引用」に関わる誤用である。

(19) 横田淳子 (2005) <\*によると→は>、「～にとって」と「～に対して」は態度・感情の対象を表す時誤用を生む可能性があるとして分析している。

(20) 筆者の考え<\*によると→では>、「有関」はいつも形容詞の作用として使われている。

(19) は文末の帰結が合わない。(20) は、「によると」で自分自身の考えを情報の出所として表現しているところに不自然さがある。

#### 3.2.2 「\*ニヨルト→Y」の誤用要因

「\*ニヨルト→Y」の誤用は、「によって」との混用が非常に著しい。この点について、市川(2010:575)は、「によると」「によって」「にとって」などは、意味用法は全く異なっているのに、発音が似ているためか、混同がしばしば見られる」と述べている。

発音の類似を除くと、「によると」と「によって」は共に動詞「よる」をもとにしていることが挙げられる。動詞「よる」との関連について、森田・松木 (1989:14) は次のように述べている。

「因る」「拠る」「憑る」「依る」「縁る」などと表記されるが、いずれも基本義「事物・状態・作用等が他の要素を根拠としてそれに基づいて生じる」ということである。ただ、その根拠となるべき他の要素の性格によって、動詞「よる」の意味も分化してくるのである。

要するに、「によって」と「によると」は、形態的にも意味的にも共通しているところがあると言える。そして、現象や判断の拠りどころを示す場合の弁別は尚更複雑である。よって、学習者にとって「によって」と「によると」の区別が混乱しやすく、過ちやすい。

更に、中国語訳語から見ても、両者も類似している。『教師と学習者のための日本語文型辞典 中国語訳 (簡体字版)』(グループ・ジャマシイ編著、徐一平等訳、2001)によれば、「によると」も「によって」も“据”“根据”に訳すことができる。(21)と(22)は、“据”“根据”

を使用している中国語表現と、それに対応する日本語訳である。

- (21) a. 根据天气预报, 明天会下雨。  
 b. 天气预报によると, 明日雨が降るそうだ。  
 (22) a. 根据成绩, 将学生分配到各班。  
 b. 成績によって, 学生を各クラスに分ける。

(21b)と(22b)のように日本語で表現すれば、全く異なる表現を使用するが、(21a)と(22a)のように中国語で表現すれば、どちらも“据”“根据”を使用することができる。

このように、両者は発音・形態・意味・中国語訳語において類似しているため、学習者は誤って使用している。

一方、「引用」に関わる誤用に関しては、情報の出所ではなく、学習者は立場や視点を表し、結論を下したりしている。ただし、「筆者の考えに基づいて言えば」「歴史的な視点に基づいて見れば」という「拠りどころ」に近い意味合いが読み取れることから、学習者は「引用」をより広範囲的に理解していると示唆される。

以上、「\*ニヨルト→Y」について考察してみた。この誤用パターンは「によって」との発音・形態・意味の類似、更には中国語訳語における類似性に深く関わることと、「拠りどころ」という意味合いに影響されることに起因すると言える。

### 3.3 「\*カラミルト→Y」

#### 3.3.1 「\*カラミルト→Y」の誤用分析

「\*カラミルト→Y」の誤用例を見たところ、学習者は、「～から判断すると、こういう結論を得た」という意味合いとして理解していると推測できる。(23)～(26)は「\*カラミルト→Y」の誤用例である。

- (23) 以上の分析<\*から見ると→から>, 中国語には「質問」型, 「呼称」型が多いことが分かった。  
 (24) このこと<\*から見ると→から>, 日本語は礼儀的な特徴が強く, 中国語は挨拶手段に富んでいると感じられる。  
 (25) …仕方」と「おしゃべり」の三つのレベルから取り扱うのは初耳であった。わたし個人の日本語の習得の経験<\*からみると→みても>, この三つのレベルは確かに大体当てはまる。  
 (26) 対外的には, 開放政策を行っていた。『唐六典』<\*から見ると→では>, 当時の唐王朝には七十余の国と政治や貿易の往来があった。

(23)と(24)は、類似の誤用である。前の内容をまとめるときに使用する「…から…が分かった」「…から…と感じられる」という表現に由来するものである。(25)は、普通個人の経験だけを頼りに判断する場合、当てはまるかどうか分からないという暗黙の知識が働いており、逆接表現「ても」のほうが自然である。(26)は、『唐六典』を参考としたことを表したがであろうが、「から見ると」は出典の明記を表すために使用するのには適切な表現ではない。

#### 3.3.2 「\*カラミルト→Y」の誤用要因

「から見ると」は、「立場のえらびだし」「側面のぬきだし」「比較の基準の設定」という「視点のえらびだし」(高橋, 2003:277)を表す。その直前に接続するのは、立場、視点、比較の基準を表すものが多い。他方、「から見ると」は判断の根拠を表すことができない。学習者が書いた論文のような硬い文章において多く見られる「以上の分析から見ると…」「以上の例から見ると…」といった表現の使用も、前の内容に基づき結論を下すというものである。こうした状況を見ると、学習者は立場、視点、基準を明示する意味の他、「から見ると」を判断や結論を下す標識として理解している可能性が高い。

学習者がこのように理解しているのは、動詞「見る」の意味が関連していると考えられる。動詞「見る」には、「判断をする」「評価する」(『大辞林 第三版』, 2006)という語義がある。一方、「から見ると」は既に動詞「見る」の意味を失い、文法的意味を持っているため、判断の根拠などを表すことができない。こうしてみれば学習者は「から見ると」の文法的意味を動詞「見る」の意味と切り離していないことが示唆される。

また、この理解のズレは中国語の影響を受けている可能性もある。「から見ると」に対応する中国語訳は「从…来看」(『教師と学習者のための日本語文型辞典 中国語訳(簡体字版)』グループ・ジャマシイ編著、徐一平等訳, 2001)である。「从…来看」は立場のみならず、判断の根拠も表せる。(27)と(28)は「从…来看」を使用している例である(下線は筆者による)。

- (27) 不过现在从敌人对这个计划的态度来看, 这一切可能都无意义, 不理睬是最大的轻蔑。单对我打击最大的不是这个。(刘慈欣『三体』)  
 (28) 单从袁在突动身上花钱的情形来看那关系就很不平常。(爱新觉罗·溥仪『我的前半生』)

(27)では、「敌人对这个计划的态度(敵のこの計画に対する態度)」は、「这一切可能都无意义(この全て

は無意味だろう)」という判断を下す根拠となっている。(28)では、「袁在突動身上花錢的情形(袁が突動のためにお金を費やす様子)」から判断し、「彼らの関係は普通ではない」という結論が出されている。このように、中国語の「从…来看」の影響を受けることが原因で、学習者は「から見ると」の理解にズレが生まれ、誤用を生じさせていると考えられる。

「\*カラミルト→Y」には、判断の根拠に近い「～から判断すると、こういう結論を得た」の意味合いとして使用されているという誤用の特徴があり、動詞「見る」の意味及び中国語訳語「从…来看」の影響が要因にあると考えられる。

### 3.4 「\*ニナルト→Y」

「\*ニナルト→Y」は主題のとりたてに関わる誤用である。(29)と(30)は、「\*ニナルト→Y」の誤用例の2例である。

(29) 長沙の環境<\*になると→といえは>, 天气がいちばん悪いということです。

(30) 中国では赤色が非常に好まれる。中国で「赤」<\*になると→という>, めでたいお祝い事が人々の頭に浮かんでくる。

森田・松本(1989:53)によると、「になると」は「ある物事を題目として取り立てる機能を果たす。…取り立てた事柄が内包している条件・資格などを想起した上でそれに判断を下すといった意図が強く込められている」点が他の題目提示の複合辞と違うところである。従って、(29)と(30)のように、「になると」は単に主題を提供して関連事項を述べるときには使いにくい。

## 4 おわりに

本稿は『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.10を資料とし、接続助詞「と」の非条件的用法に関する学習者の誤用に焦点をあて、「\*トイウト→Y」「\*ニヨルト→Y」「\*カラミルト→Y」「\*ニナルト→Y」の誤用特徴及び要因を考察し、次のようなことを明らかにした。

①学習者は「という」と主題のとりたてとして使用し、特定の物事や人物をとりたてるときに多用している。この誤用パターンは、「という」と中国語の“说起”“说到”の間における主題の収束の相違に関わっていると考えられる。

②「\*ニヨルト→Y」の誤用は「によって」との混用と、「引用」に関わる誤用に分けられる。「によって」

との混用は、両者が動詞「よる」に由来しているため、発音・形態・意味が類似していることと、更には中国語訳語が類似していることに要因があるであろう。一方、「引用」に関わる誤用は「掘りどころ」の意味合いに影響されていると考えられる。

③「\*カラミルト→Y」は判断の根拠を表すのに使用されている。この誤用パターンは動詞「見る」の意味及び中国語訳語の「从…来看」と関係がある。

④「\*ニナルト→Y」は単なる主題のとりたてに使用しにくい。学習者はそれを誤って使用している。

「と」「たら」「ば」「なら」の非条件的用法は比較的周延的なものであり、十分に研究されているとは言えない。本稿は「と」のみを対象にしているため、「ば」「たら」「なら」の非条件的用法に触れることができなかった。一方、「によると」「から見ると」などを非条件的用法としてではなく、複合辞として取り上げることがもできる。今後、より深い追究が期待される。

## 【注】

[1] 国立国語研究所(1964)では、「前おき」という表記が使用されている。本稿では、「前置き」に統一する。

[2] 劉曉華(2018)は、「結果や内容、手段や方法の提示用法」、「発見結果の提示」、「対人機能型の定型表現」として、次のように指摘している。

「結果や内容、手段や方法の提示用法」は「と」「ば」などの前に、「換言する」「述べる」など言語活動や、「比べる」「調べる」などの計算したり調べたりした結果や結論を常に喚起させる意味を表す表現が来るものである。(i)が劉曉華によって提示されている例である。

(i) (Fえ) このように(Mとか言って)は引用句の後ろに置かれることから引用マーカーとしての機能があると考えられます。以上のことをまとめると、日常会話で使われるとか表現の機能(Fえ一)、次のようになります。(A06F0028)

「発見結果の提示」は、前件の動作は後件の状態発見のきっかけ、あるいは、手段や方法として考えられるものの、前後事態間には「条件づけ」を持っていないものである。(ii)がその例である。

(ii) だから散歩をするのにはとても良い場所ではないでしょうか。もう歩くところにもう(Dほ)畑とか田んぼがたくさんあるので(Fあ)自然がたくさんまだ残っているとだと思います。(S03F0229)

「対人機能型の定型表現」は、(iii) のような、「動詞 + していただければ (たら) と思う」「可能動詞 + たら (ば) なあ」など話者の願望を表す慣用表現のことである。

(iii) (F えー) 将来的には公開いたしますので(F え) ぜひ (F あの一) 御研究の (F お一) に何かの参考にしていただければと思っております。(S00F0082)

[3] 『日本語日常会話コーパス CEJC』のホームページによると、当該コーパスはさまざまな場面における自然な日常会話をバランスよく収めたものである。2018年12月に世界で初となる映像付きの日常会話コーパス (50時間分) が公開、2021年2月17日に50時間のデータを2020年度版としてオンライン検索システム『中納言』で追加公開し、合わせて100時間のデータを『中納言』で検索することができる(参照2021-6-20)。

[4] 池谷 (2020) は、「決まった言い方でその前後の形式とともに文法化しているもの、あるいは、前置き用法よりさらに接続詞化し、「そう言えば」「言ってみれば」「考えてみれば」のように「れば形」付く形が(原文ママ) 比較的短いもの。比較的文頭に近いところに置かれる」という用法を「イディオマティックな用法」と呼んでいる。

[5] 『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』の短単位検索機能を利用し、「名詞 + という」との例文を無作為に抽出している。

[6] 誤用例の中に、「によって」に直されていないものの、「によって」の間違いに思われるものがある。例えば、次の例がそうである。

(iv) そして、三人でそうしました。勝負 < \*によって が決まって >、木村さんが初めに蹴ることになりました。

この文は、「誰が初めに蹴るかは勝負次第だ」「勝負の結果、木村さんが蹴ることになった」といった二つの出来事がひとまとめにされ、それが「によって」によって表現されていると考えられる。

## 参考文献

池谷知子 (2020) 「日常会話における「れば」の意味機能」『Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin: トークス』(23), 神戸松蔭女子学院大学学術研究委員会, 31-47.

市川保子 (2007) 『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク.

市川保子 (2010) 『日本語誤用辞典—外国人学習者の

誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク.

グループ・ジャマシイ編著, 徐一平等訳 (2001) 『教師と学習者のための日本語文型辞典 中国語訳 (簡体字版)』くろしお出版, 外语教学与研究出版社.

国立国語研究所 (1964) 「条件の表現 [一] …… 「と」「ば」「たら」「なら」」『現代雑誌九十種の用語用字第3分冊』147-158.

国立国語研究所『日本語日常会話コーパス CEJC』. <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc-monitor.html> (参照2021-6-20).

高橋太郎 (2003) 『動詞九章』ひつじ書房.

藤田保幸 (1987) 「「～トイウト」「～トイエバ」と「～トイッテ」「～トイッテモ」— 複合辞に関する覚書」『国語国文学報』(44), 愛知教育大学国語国文学研究室, p141-152.

北京商務印書館・小学館編 (2003) 『中日・日中辞典』小学館.

前田直子 (2009) 『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版.

松村明編 (2006) 『大辞林 第三版』三省堂.

森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』アルク.

叶希 (2018) 「ビジネス会話における条件表現: 職場の自然談話録音を資料として」『国学院大学日本語教育研究』(9), 国学院大学日本語教育研究会, 105-119.

劉曉華 (2018) 「日本語の条件表現における母語話者使用実態の考察: 言語使用コーパスに基づく調査」『東アジア日本語教育・日本文化研究』(21), 東アジア日本語教育・日本文化研究学会, 123-147.

## 用例出典

『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.10, 関西学院大学于康研究室.

『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』国立国語研究所, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>. (参照2021-6-23).

愛新觉罗・溥仪 (2018) 『我的前半生』北京联合出版公司.

刘慈欣 (2011) 『三体』重庆出版社.

老舍 (2012) 「老张的哲学」『老舍作品集』译林出版社.

朱自清 (2018) 「说扬州」『朱自清散文集』南京出版社.

(主任指導教員 佐藤暢治)